

自然の摂理を追って

味岡伸太郎展

「えんちゅうのしぶんのいちのしかくちゅう 2004-2021」

会期:2021年9月11日~10月9日
会場:RED AND BLUE GALLERY



展示ギャラリーのエントランス。存在感のある立体群と書が会場内へと誘う

愛知県豊橋市を拠点に、多様な作品を発表し続ける現代作家の味岡伸太郎氏。荒々しい肌理をむき出しにする木の立方体作品と書を組み合わせた今展は、ともすれば意表をついたものに思われるが、そこには確かな親和性が宿る。「自然の摂理」が身近に感じられる味岡氏の作品世界に足を踏み入れた。

味岡伸太郎 あじおか・しんたろう 1949年、愛知県豊橋市生まれ
「美術に係わることでデザインが大眾に迎合しない。デザインに係わることで美術が社会との接点を見失わずにすむ。美術とデザインが造る山の稜線上を歩け。どちらへ足をとられても谷に落ちる」画家・山口長男からなげかけられた言葉が活動の基準になっている。現在は精神的にも、物質的にも自然を主題にした美術と、タイプフェイス・タイポグラフィを主にしたグラフィックデザイン。建築のデザイン等を並行して続けている。

2004年に制作された第1作。まずこの四角柱の立体が完成し、そこからさまざまな木を使った制作に広げていったという



円柱の木を4分割し、それを反転させて木串で組み立てると正方形になる。そのフランを端的に表した立体



繊維の生々しさや力強さが伝わってくる

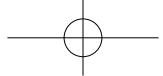
不思議な四角柱と書のうねり

—円を四分割しそれを反転すると正方形になる。こんな小学生でも知っていることに気がついたのは、三十年以上前のことだった。

そのことを、枝や丸太の断面に適用して四分割し、それぞれの向きを反転して木串で組み立て、頂点を結びと断面が正方形な四角柱が出来上がる。

そして「四分割」に因み、「裂」の字を書いた。——「えんちゅうのしぶんのいちのしかくちゅう 2004-2021」に寄せて

味岡伸太郎氏といえば、「あいちトリエンナーレ2016」で、採取した土に木工用ボンドを混ぜ綿布に定着させて「絵画」として発表した作品が大きな注目を



木のオブジェ群と、もうひとつの手の仕事である書「裂」が鎮座する。荒々しく静かな空間をかたち作っている



初日のトークショウの様子。ゲストの井上昇治氏が味岡氏に率直な質問を投げかける。テーマは味岡氏の美術史観や制作観に及んだ



「OutermostNAGOYA」主宰の井上昇治氏（左）と作家の味岡伸太郎氏（右）

浴びた。その他にも絵画・書・陶芸・立体造形・生花……と、平面から立体まで、手がけるアートが多岐にわたる稀有な作家であり、活動の全てを言い表すのは難しい。今展は昭和の残り香が漂う東京・新富町のRED AND BLUE GALLERYにて、木を用いた立体と、二十代の頃から取り組んできた書を組み合わせたインスタレーションが披露された。木の繊維のうねりやたわみと、掛軸の筆跡に残る墨のうねり。双方が視覚に飛び込んでくる。これは床の間の掛け軸と生花の関係を想起させる。割り裂かれた木材と紙に擦り付けられた墨の分子が、今にも動き出しそうなきりぎりのところで留まり続けているような奇妙な緊張感。

展覧会初日には、「OutermostNAGOYA」主宰でライターの井上昇治氏と味岡氏のトークショーが行われ、そこで味岡氏の創作の源が次々と語られた。味岡氏の語ったところでは、木を四分割し、反転させて木串で組み立て直す四角柱の制作は、三十年ほど前に始め、以来断続的に続けてきたという。どの枝を選び、どの角度で四分割するのか、繋ぎ合わせる形状・本数・位置、締め具合など、その瞬間ごとに自ずと決断を迫られる。予測はしても、どのように割れるかは木が持つ目次第。組み立て終わるまで結果の形象は分からず、人間が完璧にコントロールできるものでもない。「面白い枝を探す」という作為は排除される。味岡氏の創作にとつては、そこそが最も重要なのだという。味岡氏は創作に自我や作為が入り込むことを忌避し、偶然による形の生成を求めている。

自然のもたらす無作為

故・井上有一に師事した二十代での書の経験が、味岡氏のあらゆる創作の原点となっている。文字を書くということは必ず身体上の制約を受け、書きやすい方

向（上から下へ、あるいは右手で横線を引く際は左から右へなど）が生じる。書く動きのベクトルはあらかじめ用意されており、次の動きを意識したり作り出したりする必要はない。そして「書き順」に従って書くことで線は文字となる。これは西洋絵画のコンポジション（構図）の考え方と決定的に異なる点だ。文字には書き順があるのみで、だから味岡氏にとって腕の自然な動きとは「自然の摂理」なのだ。書いている最中はうまく書こうという意識もないのだという。

自然を否定せず、道理に束縛もされず、その結果で行為を確認し続ける作家の姿は、全てがコントロール可能な状態を安易に求めてしまわれわれ現代人にとって、「謙虚であることほど創造に近づく」ということを黙示しているようでもある。

裂けた木材から発せられる匂いは、何はなくともコロナ禍で疲れれた精神を清浄に戻してくれるような清涼感をもっていた。「ああ、自然」と、自然に口をつけて出たことを嬉しく感じる。

新刊

作品集&対談集

自我と無作為と
インスピレーションと
美術と自然と
人間の旅と継続



味岡伸太郎×

村田真宏（全豊田市美術館館長）
櫻井拓（編集者）
湊千尋
（あいちトリエンナーレ2016芸術監督）
拝戸雅彦（愛知県美術館館長）

A5並製・128頁 本体 1,500円+税
春夏秋冬叢書 TEL 0532-33-0086
sou@h-n-a-f.com
http://www.h-n-a-f.com/new.html

味岡伸太郎氏のこれまでの創作活動をまとめた一冊。対話形式で創作の根源に迫る。過去の作品・展覧会についての詳細も写真付きで紹介。